国立東京療養所東講堂にて
ピリポの伝道（1）
――使徒行伝第８章――

（『愛泉』誌第19号、１９５８年5月20日発行）

１９５７年10月27日
小池辰雄

言動一致　栄光は御名に　御霊の按手　十字架による転換　聖書の縮図　御霊の伝道

【使徒8】

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。
その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は
皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。2敬虔なる人々ステパノを葬り、
彼のために大に胸打てり。3サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出
して獄に付せり。
4ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、5ピリポはサマリヤ
の町に下りてキリストの事を伝う。6群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を
一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。7これ多くの人より、之に憑き
たる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに
因る。8この故にその町に大なる歓喜おこれり。
9ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を
驚かして自ら大なる者と称えたり。10小より大に至る凡ての人つつしみて之
に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。11かく謹みて聴けるは、
久しき間その魔術に驚かされし故なり。12然るにピリポが、神の国とイエス・
キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテス
マを受く。13シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと
偕に居り、その行う徴と、大なる能力とを見て驚けり。
14エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、
ペテロとヨハネとを遣したれば、15彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈
れり。16これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いま
だ其の一人にだに降らざりしなり。17ここに二人のもの彼らの上に手を按き
たれば、みな聖霊を受けたり。18使徒たちの按手によりて其の御霊を与えら
れしを見て、シモン金を持ち来りて言う、19『わが手を按くすべての人の聖

霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』20ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。21なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、なんじが心の念あるいは赦されん。23我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』

25かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。

26然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』27ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、28帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。29御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』30ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』31閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。32その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに黙すがごとく口を開かず。33卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』

34閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』35ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。36途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』37（なし）38乃ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。39彼ら水より上りしとき、主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。40かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣伝えつつカイザリヤに到れり。

●言動一致

1サウロは彼の殺さるるを可しとせり。

まだパウロではありません。サウロです。己を義としていたサウロですから、殉教の死を遂げましたステパノを、つらつら目のあたりに見、その殺されるを可しとしたのです。

その日エルサレムに在る教会に対いて大なる迫害おこり、使徒たちの他は皆ユダヤ及びサマリヤの地方に散らさる。

この「使徒たち」とはペテロ、ヤコブ、ヨハネ等のことでありまして、親しくキリストを受けとったところのご連中ですが、その他の人々は元来ユダヤ教でなく、異邦人でありながら福音を受けた、ギリシア語を語るヘレニストといわれている人々たちです。今日出てくるピリポという人もヘレニストでして、使徒行伝の6章5節に出てくるピリポです。このような人たちをヘレニスト・クリスチャンというわけです。

2 **敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大に胸打てり。**

この壮烈な、しかし、本当の勝利の最初の殉教者ステパノの死を見て胸を打った。

3 **サウロは教会をあらし、家々に入り男女を引出して獄に付せり。**

相変わらずこのパウロの前身サウロは息巻いていた。

4 **ここに散らされたる者ども歴巡りて御言を宣べしが、**

「御言を宣べる」とは、「福音する」ということです。

5 **ピリポはサマリヤの町に下りて**

多分、シケムという町ではないかという。

キリストの事を伝う。 6 **群衆ピリポの行う徴を見聞して、心を一つにし、謹みて其の語る事どもを聴けり。** 7 **これ多くの人より、之に憑きたる穢れし霊、大声に叫びて出で、また中風の者と跛者と多く医されたるに因る。** 8 **この故にその町に大なる歓喜おこれり。**

正にキリストの御霊と信仰とに満ちたるピリポは、キリストの弟子らしい歩き方をしていた。即ち、御言を伝えるということと、神の力のある恵みの徴がここに展開していくということとは、いつも使徒たちの言動においては並行している。言動が一体となってそこに展開していくのです。穢れし霊すらも

「御名により出でよ！」

と言えば、出て行く。大歓喜の福音ですから。

●栄光は御名に

9 **ここにシモンという人あり、前にその町にて魔術を行い、サマリヤ人を驚かして自ら大なる者と称えたり。**

シモンという少し霊的な不思議な人物がおりまして、その魔術で人を驚かすような業を行っていた。ここで注目しなければならない箇所は、

「自ら大なる者と称えたり」

というところです。キリストの使徒たちおよび弟子たちクリスチャンは、自ら大いなる者と称えたら、これはもうクリスチャンではない。この魔術を行う者は魂においては、霊界の消息にはかなり入っている。しかし、霊は、キリストの霊のほかその他諸々の霊がありまして、ヨハネ書簡の中にも、

「**全ての霊を信ずな、全てよく弁えよ**」

言っているとおり、このシモンは何か別の霊による力を得てやっているわけです。別なということの性格はどういうところに表れているかというと、これは「大いなる者と称えたり」という霊的傲慢に陥っているところです。これは偽基督、偽預言者の方向であります。サタンがそもそもそれなのです。サタンは自ら脹れ上がる方ですから。

サウロ自身が実は霊的傲慢に陥っていた。サウロのは魔術ではなくて実存的にですが、正しかったのです。しかし、その立派さということを誇っていた。即ち、道徳的、宗教的な自分の長所を義としているところが罪なのです。

「自ら大いなる者と称えたり」

という、いわゆる教祖的角度です。

10 **小より大に至る凡ての人つつしみて之に聴き『この人は、いわゆる神の大能なり』という。** 11 **かく謹みて聴けるは、久しき間その魔術に驚かされし故なり。** 12 **然るにピリポが、神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うるを人々信じたれば、男女ともにバプテスマを受く。**

ピリポにおいては自ら大いなる者どころの騒ぎではない。全然反対に、

「神の国とイエス・キリストの御名」

あるのみです。人々はこれを受けとった。

13 **シモンも亦みずから信じ、バプテスマを受けて、常にピリポと偕に居り、その行う徴と、大なる能力とを見て驚けり。**

だから、この霊的なことは、下手をすると混乱しますね。「シモンも自ら信じ」というのですから。しかもバプテスマを受けた。そして、常にピリポと共におりますから。これは大いに良いと思っていたわけです。また思われていい事態なのです。彼はバプテスマを受けたが、それは外側からでした。本当に受けている始末ではない。このシモンはピリポが受けている霊とは、同じ霊力でも霊の質が違う。それでその質はどういうことにおいて見極めがつくかというと――他の霊だって病を治しますよ、また不思議な術もしますよ。現象面からいうと同じに見える。けれども質が違う、内容が違う――即ち、そこにおいて立てられているものは、一方は、ある霊的な力、御利益的な角度でありましょうが、福音は御利益ではない。病が治るということではない。

「神の国がそこに現ずる、イエス・キリストの御名がそこに崇められる」

ということです。それから発してくるところの、病が治ることであろうと、それはいいですが、病が治るということが目的となるならば、それはおかしい。コリント前書12章３節にも、

「**聖霊に感ぜされば、誰もイエスは主なりと言う能わず**」

とあります。イエスを、

「主キリスト、メシヤ、膏注（あぶら）がれたる者」

と告白するときに、初めてそれが御名ということになる。即ち、私たちにとっては、このイエスは宗教的天才とか何とかいうのではありません。イエスは神の国を自らそこに現じられたものであって、神の国の中心体である、中核である。それがキリストの名の実なのです。私たちにとっては、キリストは何者であるかというと、

「救主（すくいぬし）である」

ほかの何者でもない。即ち、「神の栄光の現われ」であることは同時に「人間の救い」であるということです。私たちの救われんがための福音ではない。神の栄光が現じたものが福音です。神の栄光が現われるということは、同時に私たちが救い上げられるのです。「救われる」ということは、「神の民とされる」ということ。その他に救いはない。何か私たちの側が救いの目的であるかのように、幸（さいわい）せられるかの如くだったら、そのうちに信仰は力をなくしておかしくなってしまう。だから、「神の栄光の顕れ」ということが、どこまでも中心です。そこには全然「私」が立っていませんから。およそ魔術なんていうこととは世界が、質が違うのです。我々が、

「主イエス・キリスト！」

と祈りの中で本当に呼びまつるときには、

「南無阿弥陀仏！」

といえば阿弥陀が自分の中に入ってくるように、自分の中にキリストの栄光が現じて行くのです。そして、それは神さまが上の方から実力をもって証しをなさる。その人の実存に現われてくる。それは普通の生活においても、勉強においても、仕事においても、病が癒えるという不思議な術においても、あるいはいろいろな面において現れていく。

だから、使徒行伝3章においても、ペテロが言っている通り、跛者が立った時に、

「なんぞ我を見つめるか」（使徒3・12）

というペテロの答えは非常に大事な答えです。私たちの力でも、敬虔（けいけん）でも、信仰でもありません。キリストですよ。自分の信仰が、自分の実存が何ものかと思っていたら、とんでもない間違いです。私には何もないけれども、

「ナザレのイエス・キリストの名によって歩め」

と言った。

「キリストの名がそこに崇（あが）められ、そこに現じていくことだけだ」

という。生まれつきの跛者が立ったのも、ただそれだけなのです。

「キリストの栄光の現われ」

であって、御利益ではない。その栄光の現われるのを「恩恵（めぐみ）」といい、栄光に恵まれるとは、ますます

「キリストのものとされていく」

ことです。これがピリポが、

「神の国とイエス・キリストの御名とに就きて宣伝うる」

ところです。また私たちの受けとるべき角度だと思います。

●御霊の按手

14 エルサレムに居る使徒たちは、サマリヤ人、神の御言を受けたりと聞きて、ペテロとヨハネとを遣したれば、15 彼ら下りて人々の聖霊を受けんことを祈れり。16 これ主イエスの名によりてバプテスマを受けしのみにて、聖霊いまだ其の一人にだに降らざりしなり。17 ここに二人のもの彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり。18 使徒たちの按手によりて其の御霊を与えられしを見て、シモン金を持ち来りて言う、

これはいかにもピリポの伝道においては、御霊が未だ働かないように見えるでしょう。けれども、ここにおいて言われていることは、ピリポ自身についてであるとは私は思わない。また註解書も、そのことはそうは思わないという意見がもちろん多い。ただエルサレムのペテロ、ヨハネという連中の聖霊における権威というものをここにはっきり現わすためにこのような書き方をしたのだろうと、学者は想像しますが、まぁそれはどうでもいいです。しかし、このペテロ、ヨハネという使徒たちが明らかに御霊の按手をしたという事実は事実なのです。だから、それを端的に受けとって行けばいいだろうと思います。

「彼らの上に手を按きたれば、みな聖霊を受けたり」

と。教会においては按手礼、按手ということをします。この按手は御霊を本当に受けていなくて、いいかげんな按手をしてはもちろんいけないのです。使徒たちの按手は、ここばかりに限りませんが、御霊が与えられることです。これはキリストの贖罪、恩恵、十字架、復活の事態が説かれて、そして彼らの魂が開かれてきたときに、按手を通し霊が降った。手を按くということは旧約からずっとあるように、非常に福音において厳かな、また大事な事態なのです。

ペテロだってヨハネだってみな罪びとです。しかしながら、キリストに本当に身を投げて、信じ受けとるときには、この穢れたる体に、この土の器を通して主は働き給う。ですから、御霊は按手によって伝えられて行くということは事実です。そして、ある時には異言、霊歌というような現象も起きたりします。しかし、問題は現象ではない。御霊が本当にそこに臨むことです。この栄光のキリストはいま我々の間に御霊をもって降り、あなた方一人ひとりの上に御霊をもってこの霊の按手がされつつあるわけです。なるほど、病の状態がある時には良くなったり、悪くなったりいろいろするでしょう。けれども、皆さん、からだの具合がおかしくなったら、

「自分の信仰がちょっと停滞したかな」

なんて思うことはないですよ。「自分の信仰」なんて見ていたらダメです。私だって自分の信仰を見て、そいつをバロメーターみたいにグラフなんて書いたらしょうがない。私は自分の信仰のグラフなんて書かない。信仰の世界は水を割ることは絶対にない。左顧右眄することは絶対にない。信とは絶対なことですから、自分の側の状態の如何に拘らず、どしどし受けとっていい。こういう角度になってきたならば、毎日毎日が祈りの世界において御霊のバプテスマを受けて進んで行きます。

しかしながら、普通のキリスト教会においては、そういうようなことがない。さきほどちょっと、ある教会に行ってお話をして来ました。そこの教会にはロシアのモスコーで生まれた女の独身のドイツ系のロシア人がいまして、51歳とかいってましたが、その人がその教会を牧している。そこの学生が私を呼んだのでお話をしてきたのですが、その婦人はやはり御霊のクリスチャンでした。そこで私が畳みかけて諄々とお話をしましたが、本当に喜んで受けとってくださった。ああやはりこういう教会もあったのかと、とにかくそういった、とけた婦人でありました。戦争中ロシアでは宗教の弾圧がひどく、その時も秘かに集会を持って、讃美歌なんか歌えませんから、聖書を静かに読んで静かに祈って終る、そういう集会だったそうです。帰る時には一人出てから5分位経ってからまた一人出て行く。そうしないと、集会が分かったら大変なことですから。そんなようなこともしてきたことを聞いて、本当に素晴らしい魂だなぁと私は思いました。

しかし、この

「御霊のクリスチャン」

は今こそ非常に必要なときなのです。どういう現実がくるかわからない。あるいはどういう迫害がくるかわからない。とにかく、どういう現実が来ましても、私たちの中にキリストの御霊が来ていれば、

「自分の信仰」

なんて言って力んでいるのではなく、御霊の主が私たちの中に霊核となり、芥子種一粒と成って生き給うならば、大丈夫、前進できます。勝って行きます。

「世に勝つ勝利」

は我らのこの信仰である。我れに賜いたるこのキリストの信が世に勝つ勝利である。

●十字架による転換

このシモンというのがインチキでした。

シモン金を持ち来りて言う、19**『わが手を按くすべての人の聖霊を受くるように、此の権威を我にも与えよ』**

御霊の権威を金で買うなんて、とんでもない了見です。いかにこれがインチキであるかは、この一言にて暴露されてしまう。「シモニヤ」という言葉はここからきた。聖なるものの売

買をシモニヤという。ダンテが地獄の19篇でこいつを罰しています。だから、

20ペテロ彼に言う『なんじの銀は汝とともに亡ぶべし、なんじ金をもて神の賜物を得んと思えばなり。21なんじは此の事に関係なく干与なし、なんじの心、神の前に正しからず。

ペテロは権威をもって語っている。

22然ればこの悪を悔改めて主に祈れ、

悔いなかったらダメ、ごまかしていたらダメです。

なんじが心の念あるいは赦されん。23我なんじが苦き胆汁と不義の繋とに居るを見るなり』

ちゃんと霊にて彼の肉体と霊とがいかに禍な状態であるかということを見られたわけです。それでシモンは恐れてしまって、

24シモン答えて言う『なんじらの言う所のこと一つも我に来らぬよう、汝ら我がために主に祈れ』

と。その先はどうなったか知りませんが、悔い改めてキリストの前に自分の心の方向転換をしなければダメなのです。その悔い改めがどこからくるかというと、十字架を私たちが仰ぐところからくる。私たちは自分でいくら心の方向転換をしたって、そんなことではまた元に戻ってしまう。キリストの十字架の恩寵にぶつかると、私たちの心が、魂がひっくり返るのです。だが、悔い改めんと欲するのは大切ですよ。求めるのは大切です。しかし、求めるのがどこで求めるかというと、十字架に来なさい。そうしたならば、私たちの方向転換は十字架という、この軸で回転するのです。こっち側から向こう側に移される。そうしたならば、復活のキリストの方に向かう。十字架の軸でなかったならば、回転できない。悔い改めるということは回心ということですから。

「私たちは十字架で贖われました」

と、いくら観念的に思い込んでもダメです。どこまでも魂の世界は具体的でありますから、私たちがこの魂の世界で心の具体的な方向転換をしなければダメです。

私はここに立っています。私はこの机の向こう側に行きましたと言ったって、行っていない。私は歩いて、そっちに行かなければ、そっちに来たのではない。そのように魂はただ思い込んだってダメです。魂が本当に魂の世界で、歩いて行ってぶっ倒れて方向転換しなければダメです。だからこれは全身的な行ですから、

「信即行」

と申し上げるのです。厳密に厳密にという概念的な厳密でなく、実に身を、行をもって答案を書くような、証しをするような信を持ってください。ところが、シモンはできなかった。

●聖書の縮図

25 **かくて使徒たちは証をなし、主の御言を語りて後、サマリヤ人の多くの村に福音を宣伝えつつエルサレムに帰れり。**

26 **然るに主の使ピリポに語りて言う『なんじ起ちて南に向かいエルサレムよりガザに下る道に往け。そこは荒野なり』**

ところで、ピリポという人は祈りの深い人です。それで主の使いに出っくわした。パウロもペテロもよく主の使いに出っくわした。ピリポは北のサマリヤの方に向かっていたのに今度は、180度の方向転換をして、ガザに下って往けという。ガザはエルサレムより南南西位のところにある。

27 **ピリポ起ちて往きたれば、視よ、エテオピヤの女王カンダケの権官にして、凡ての宝物を掌どる閹人エテオピヤ人あり、礼拝の為にエルサレムに上りしが、**

「カンダケ」というのは「女王」の抽象名詞です。固有名詞ではありません。エジプトの「王」は「パロ」というでしょ。パロは抽象名詞です。「閹人」というのは男性の機能を奪われた人です。申命記23章1節を読みますと、

「外腎を傷ないたる者または玉茎を切りたる者はエホバの会に入るべからず」
（申命記23・1）

だからエホバの会には入れない。エチオピアの閹人はキリストのことを聞いていたのですが、悲観していたのでしょう。けれども、願いは切です。その閹人の悲願、これはやはり御使がちゃんと執り成し給うた。そしてピリポはそちらの方に向かわせられたわけです。

28 **帰る途すがら馬車に坐して預言者イザヤの書を読みいたり。**

その書を、自分で写したかどうか知りませんが、まぁ写したのでしょう、そのイザヤ書を朗読していたのですから。皆さん一人ひとりもそういった情景を思い浮かべながら読んでください。

29 **御霊ピリポに言い給う『ゆきて此の馬車に近寄れ』** 30 **ピリポ走り寄りて、その預言者イザヤの書を読むを聴きて言う『なんじ其の読むところを悟るか』**

31 **閹人いう『導く者なくば、いかで悟り得ん』而してピリポに、乗りて共に坐せんことを請う。** 32 **その読むところの聖書の文は是なり『彼は羊の屠場に就くが如く曳かれ、羔羊のその毛を剪る者のまえに默すがごとく口を開かず。** 33 **卑しめられて審判を奪われたり、誰かその代の状を述べ得んや。その生命地上より取られたればなり』**

これはイザヤ書53章のギリシア語訳からきているところです。

新約聖書からイザヤ書を取ったならば、大きな穴があきます。そのくらい新約聖書にはイザヤ書からの引用が多い。イザヤ書全66章は聖書全66巻の縮図のようなものです。新約

聖書は使徒たちがキリストを証言せざるを得ずして証言している。

イエス・キリストの死は歴史家は書かない。普通の歴史家はただ一行か二行書いたに過ぎない。パレスチナの一角で十字架の刑を受けて死んでいった。しかしながら、死で終らなかった。この一個の存在、神の子、これはどうしてもキリスト自身の力が、使徒たちを動かして、証しせざるを得なかったのがこの新約聖書です。

「一切のマイナスを、不義と涙と悲しみと苦しみを自分は呑み込んで、清らかさと愛と智慧と力と光とを、その神のプレローマ（充満）の事態をくださる」

という、この交換を即ち「贖罪」というのです。こんな交換が世の中にあるかという。贖罪、十字架の恩寵、死より生命へのバプテスマとロマ書6章に言っている事態です。

●御霊の伝道

34 **閹人こたえてピリポに言う『預言者は誰に就きて斯く云えるぞ、己に就きてか、人に就きてか、請う示せ』**

御霊をもって、聖書一巻を持って私たちも全日本を伝道できなければならない。私たちがこの聖書の聖言と深く一体となり、聖書の中から聖書が呻き叫んでいる声が聞こえるような魂にならなければ、この福音の伝道はできない。そしてまた、これがあれば聖書一巻を持って日本中を駆け回ることができる。

35 **ピリポ口を開き、この聖句を始としてイエスの福音を宣伝う。**

「イエスという福音体を宣べ伝う」

と言ったってかまわない。お説教ではない。理屈ではない。教えではない。どこまでもイエスを伝え、イエスを告白する。

「あなた方もイエスを告白するようになりなさい」

という悲願をもって語るわけです。

36 **途を進むる程に水ある所に来りたれば、閹人いう『視よ、水あり、我がバプテスマを受くるに何の障りかある』**

今度はピリポでなく閹人が言った。ピリポから福音を聞いたこの閹人は聞きながら、この福音の中に入りながら、そろそろ御霊のバプテスマを受け始めている。キリストの姿が非常にはっきりしてきた。イザヤ書53章は完全に私たちを荷いながら逆に、

「あなたたちも他の人を荷い上げて行けるようにしてやるよ」

というのが、これが福音なんです。神の国が展開して行く世界です。神さまの栄光が現われて行く世界なんです。そんな福音にピリポを通して出っくわしたものだから、

「さぁ、この水でピリポからバプテスマを受けます」

と。この水のバプテスマはこの閹人にとっては、もう聖霊のバプテスマと等しいものになってきてしまっている。悔改めのバプテスマはこの聖霊のバプテスマと相接していること

になるのです。

8 **乃(すなわ)ち命じて馬車を止め、ピリポと閹人と二人ともに水に下りて、ピリポ閹人にバプテスマを授く。**

ピリポは知らない間に、異邦人伝道をさせられています。一番初めの異邦人伝道はこのピリポです。南のエチオピアの閹人というような人に、最初にバプテスマを施したということは、いかに福音が一切の限界をつき抜けて、例外なく浸透して行くものであるかを示しているわけであります。御霊の生命は素晴らしいです。

39 **彼ら水より上りしとき、**

ピリポも一緒に入った。浸礼は実際にそういうようにするらしい。形はどうでもいいですが、とにかく水の中に入って水となった。即ち、何の水となったか。ピリポと閹人は聖霊の水となった。水のバプテスマが――聖霊が生命となって湧き出づるといったような――聖霊の水を受けてしまった。

主の霊ピリポを取去りたれば、閹人ふたたび彼を見ざりしが、喜びつつ其の途に進み往けり。 40 **かくてピリポはアゾトに現れ、町々を経て福音を宣伝えつつカイザリヤに到れり。**

この言葉は、はっきりと閹人が聖霊のバプテスマを受け、喜びつつその道に往くことを示している。集会の後は、この

「喜びつつ進み往けり」

というような魂にならなければ、その集会は本当に受けとっていない。そのような集会は何回やったって無駄になりますよ。閹人は深く水の中に浸って、このキリストにすっかり贖い潔められて、キリストの生命がやってきました。そしたら、

「主の霊ピリポを取り去りたれば」

と不思議なことが書いてある。列王記略下にエリヤが取り去られた箇所があります。

「エノクは神と三百年生き永らえたのちに神に取り去られた」

とある。ルカ伝24章にも復活のキリストがエマオ途上においてやはり取り去られたことが書いてある。

「十字架より復活して栄光に入らざるを得ないではないか」

と。ピリポのこの御霊に在って導かれている伝道が、いかに復活のキリストと同質的な事態であるかということに、私たちの目を見張らなければならない。彼は肉体を持っています。しかし、甦りのキリストの生命を身に体する時はどうですか。

未だ聖霊を受けない時のペテロは、湖上を歩いて来たキリストをみて、「変化の者か」と懼れた。キリストは、

「懼(おそ)るな、我なり」

と。ペテロは、

「主よ、貴神（あなた）ならばどうか私をそちらへ行かしめてください」

と。すると、

「来（きた）れ！」

と。このキリストの「来れ」という一言にペテロは全身をもって行ったのですよ。水を見て溺れるまで主の許に行った。未だ聖霊を受けないペテロでさえ、キリストの御霊の力の「来れ」の一言に引かれて水の上を渡って行った。しかし、風を見て恐れた。これは分裂です。しかし、

「風が吹いている。だがよろしい、少し体の調子が悪くても」

という魂になれるのです。「見ても見えない」というのはいい意味ですよ。

「見えても見えない、聞こえても聞こえない」

という。見えるのは栄光のキリストのみ、聞こえるのはキリストの御声のみと、こうなってきたならば、風が吹いても波が逆巻いても、どっこい大丈夫、キリストの許まで行けるのです。しかし、風にとらわれたから沈んだ。

「主よ、助け給え！」

と、ペテロが呼んだならば、キリストは御手をもって助け上げた。

ピリポに主の霊が本当に臨んだならば、ピリポは空中滑走して見えなくなってしまった。私はそういう体験はないが、そのまま「然り、その通り」と受けとることができる。

使徒行伝の伝道者は素晴らしい伝道者ですね。私たちが今、伝道なんて言ってますが、なんと間の抜けているものだろうかと思う。しかし、間が抜けていたっていいですよ。間の抜けたまま、

「キリストと一つに成る」

というこの一点においてこの使徒たちと質的に負けない角度に入っていけるのです。

闇人は絶対に他と比較することのできない、主の使いの執り成しによって、イザヤ書53章を地に学んだところにきてしまった。

「求めよ、さらば与えられん」

とありますが、主を切に求め、聖霊を与えられたわけであります。

皆さんは今日この集会においてキリストの生命が確かに入ってきたと私は信じます。どうか使徒行伝を読んでください。この使徒行伝は御霊の行伝ですから、御霊が行伝して行く世界ですから、これを読みながら深く祈っていったならば、私たち自身がピリポとなり、また闇人となって祝福されます。